

石塚ヨシ家文書

上戸祭村（宇都宮市）の組頭を勤めました石塚ヨシ家には江戸から明治にかけての一二九一点の史料が文書館に寄託されています。

石塚家の「百姓水呑代替り之覚」によりますと、この村の草分百姓として代々庄屋を勤めてきました三代目大内蔵から分家しました半右衛門家に組頭の家が始まるということを知っています。

元和六年（一六二〇）・承応三年（一六五四）の「御縄帳」に記された「癸未御年貢方納事」では年貢の割付は戸祭村一村で行なわれていました。寛文五年（一六六五）になりますと、上・下戸祭村に分村し、宇都宮藩では庄屋の下に組頭を設置するようになり、庄屋・組頭からなります新しい村が誕生しましたが、幕府では助郷役の負担は元禄九年（二六九六）戸祭村一村として宇都宮宿への出役を命じていました。石塚家が村政に参画するようになる

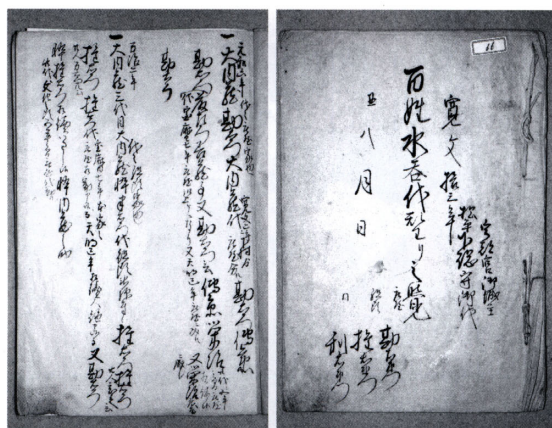
りますと、寛文と年号（一六六一―一六七三）の書かれた史料が「新田畑御縄帳」「検見帳」「庄屋給畑控覚帳」等の帳簿、年貢割付状の継紙、一札・手形等の一紙類の二十七点と多彩になってきます。この時期の農民層は庄屋共に百姓二十四人・貧農層である名子水呑三十五人を数えています。



上戸祭村家並図 (No.1218)

『日光道中宿村大概帳』によりますと、上戸祭は宇都宮宿から北へ二十町の所にあり、下徳次郎宿へは一里二十九町、中徳次郎宿を経て上徳

次郎宿へは二里十一町、『上戸祭村家並図』には日光街道に沿って東西に家数四十七軒隠居共に内寺一軒（東泉寺）が並んでいます。「田より畑多し、・・・農業の間男八往還稼いたし、・・・其外仕馴たる手業なし・・・村々一畝平地三而、山々坂無之、見渡し山々有之、且此村々より隣村又は田畑耕地へ出る小道有之共重立候脇道なし」とありますように、現在県道下岡本・上戸祭線一五七号線（長岡街道）の様な脇道は見当たりませんが、平地に面し、畑が多く、男は日光街道を利用し、駄賃稼ぎに従事していました。大半に及ぶ貧農の経済を賄ったのは駄賃稼ぎにあつたのです。

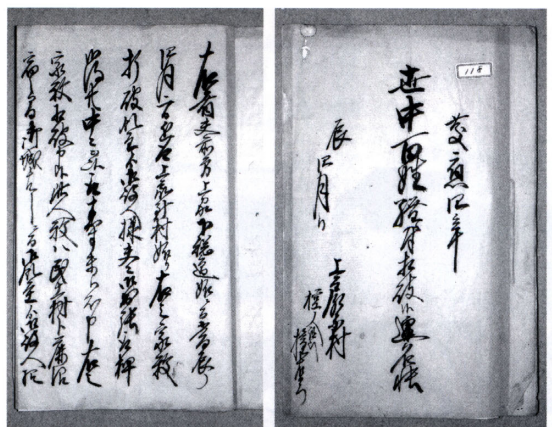


百姓水呑代替り之覚 (No.66)

幕末下野で広範に「世中百姓騒ぎ 付相破候連名帳」に見られる慶応四年（一八六八）の一揆を経て、明治の時代に入ります。「当辰ノ四月二日近郷上荒針村始り、右之家数打破」と述べ、他領の上荒針村・上中下徳次郎宿・砥上村・門前村、宇都宮領の上下戸祭村・田原村・白沢宿・今里村・上横倉村・岩原村の家々が記され、情報は宇都宮・河内・上河内に及んでいます。

近代の石塚家は組頭としての実績が新政府に受け入れられ、副戸長・勸懲方、区内村々取締、小学校副事務掛を申付けられ、近代化政策に組込まれていきました。

（渡辺 平良）



世中百姓騒ぎ=付相破候連名帳 (No.118)